

書評

Francis O’Gorman, ed., *The Cambridge Companion to Victorian Culture*
(Cambridge: Cambridge University Press, 2010)

井野瀬 久美恵

本書は、各国・地域の文学や歴史、ないしは学際的研究における「文化」への視座を広げ、理解を深めることを目的に編まれた Cambridge Companion to Culture シリーズの9冊目に当たる。ただし、ある一点において、本書は既刊の8冊とは大きく異なる。既刊書が、「近代 (Modern)」という時期区分と、アメリカ、フランス、ドイツ、ラテンアメリカ等々の国名・地域名（の形容詞形）をタイトルに掲げている（例えば *Cambridge Companion to Modern American Culture*）のに対して、イギリスを扱った本書が、“Modern British Culture”ではなく、“Victorian Culture”を用いたことだ。なぜ「イギリス近代文化」ではなく、「ヴィクトリア朝文化」なのか――。

この点に関して、ヴィクトリア朝文学を専門とする編者フランシス・オゴマンも、総論的な位置づけとなる第一章でこう問いかける。一君主が統治した時代を「ひとつの時代」として括ることにどれほどの意味があるのか。「19世紀イギリス文化」ではなぜだめなのか。ヴィクトリア女王の時代は他の君主の時代と何がどう異なっているのか。

これに対する編者自身の答えはこうである。歴史的カテゴリーとして、ヴィクトリア朝 (1837～1901) という時代区分自体に意味があるわけではない。それを意味あるものとするのは、「この時代の何を語るのか」によるのであり、その「何か」（すなわち、この時代に引き出された一連の知や情報）に先だつて、「ヴィクトリア朝的何か」が存在するわけではない。語る中身によって「ヴィクトリア朝的」の意味自体が変わる、というのが編者の主張である。

それゆえに、と編者はさらに続ける。本書を構成する各々の章は、「ヴィク

トリア朝」という時代を異なる角度から説明したものとして読むことはできないし、そう読むべきではない。「ヴィクトリア朝 (の・的)」に関して一貫した見方や考え方があるわけではないし、各章をつなげばそれが見えてくるわけでもない。それでも、この時代に出現した知や情報、作品などを注意深く観察すれば、「近代」や「19世紀」といった切り取り方ではなく、「ヴィクトリア朝」というアイデンティティで語った方が意味を持つ、あるいはそう定義できるものがある。「文化」がまさにそうだと、編者はこう言う。「ヴィクトリア朝の人びと自身が“文化”に強力な意味を与えようとしたがゆえに、“ヴィクトリア朝文化”という考え方はユニークかつ適切なのである」(p. 5)

ヴィクトリア朝という時代を生きた人びとは「文化」に大きな意味を認め、「文化とは何か」をさまざまに追求した。高尚な文化と民衆文化との違いは何か、階級やジェンダー、民族と文化との関係はどうなっているのか——こうした議論こそが、「ヴィクトリア朝の (Victorian)」という括りを、単なる時代区分以上の意味あるものにするとともに、語源となった女性君主の時代を他の君主たちと一線を画する「特別なもの」にしていたと考えられる。

本書の執筆者たちは、「ヴィクトリア朝文化」とは何か、それはどこにあるのかという問題意識を共有しつつも、その理解は各々が取組むテーマに応じてひとつではない。総論的な第1章に続く14の章では、科学、技術、経済、戦争、音楽、演劇、民衆文化、諷刺画、ジャーナリズム、美術、家政術 (domestic arts)、文学理論といったテーマが扱われており、そこから導き出される「ヴィクトリア朝的」なるものの解釈も理解もさまざまだ。しかしながら、「文化」とは、あらゆる人間の営みを包み込み、「個々の事物や人、ないし言説や活動を創造し、それらと交渉する——知的、物理的、経済的、社会的——環境」(p. 6) であると捉える見方は共有されているように思われる。以下、本書で提示された「ヴィクトリア朝文化」を読み解く鍵 (のようなもの) に注目していくつかの章を重ね読みしながら、コメントを加えることにしたい。

「ヴィクトリア朝文化とは何か」を読み解くひとつの鍵が「階級」というカテゴリーとそのコンテクストにあることは、すでに研究者の間で広く共有されているだろう。本書でも関連する章を照応させると、「階級」に対する読み

も深まるかもしれない。たとえば、「家政術」と題する第12章では、女性を中心に、生活文化が家庭重視のモラルと「ヴィクトリア朝ミドルクラス」なる存在を創造したことが語られているが、そのミドルクラスが自分たちの価値観によって下の階層を教化すべく、戦略的に用いたのが「民衆文化」という言葉だったと、第8章は論じている。確かに、今の文化理解に「民衆文化」への注目は不可欠であるが、ヴィクトリア朝においてその趣はかなり異なっていた。先の解釈に従えば、「民衆文化」に浸み込んでいたのはミドルクラスの文化イデオロギーであり、労働者階級の文化とのつながりはけっして自明ではなかった。むしろ、ミドルクラスによる教化とそれへの労働者らの対応とのせめぎ合いのなかで「民衆文化」は創造され、そこに「ヴィクトリア朝的」なるものも埋め込まれたと捉えた方がいいかもしれない。では、それはそれ以前の「民衆文化」とどのようにつながっているだろうか。あるいは分断されているのか。ここで読者は、文化の創造、再創造を「階級」からのみ捉える限界に突きあたる。

そのために本書では、「ヴィクトリア朝文化」を解明するもうひとつの鍵が提示されている。それは、人びとの空間認識や他者との関係性に生じた感覚や意識の変化に注目することである。変化をもたらしたのは、世界初の万国博覧会 (1851) で可視化された数多くの発明だ。鉄道や電話、カメラ、映画、電灯、蓄音器、海底ケーブル——これらはすべてこの時代に発明され、労働の性格や階級関係を変質させるとともに、人びとの生活圏を大きくおし広げ、資本主義経済のグローバルな展開を可能にした。視覚や聴覚の変化を通じた人びとの新しい経験は、科学への関心を底上げした。1850年代以降、シダ類収集や水族館、そして恐竜に熱狂したヴィクトリア朝の人びとは、学術談話会や博物館展示、劇場、雑誌や新聞に掲載された無数の記事などを通じて、いつでもどこでも「科学」と出会えるようになった。とりわけ、当時の科学はリアリズム小説との相性が抜群であり、第2章で論じられる科学との強い親和性は、「ヴィクトリア朝文化」の大きな特徴でもある。「ヴィクトリア朝的文化理解」の祖とも目されるマシュー・アーノルドを批判したトマス・ヘンリー・ハクスリーは、科学と文化を“and”で結ぶこと (“Science and Culture”, 1880) によって、進化論が過去と現在との関係を大きく揺さぶっていた当時、科学と文化が分かちがたく結ばれていたことを強調した、との解釈は実に興

味深い。

そうした「科学の時代」としてヴィクトリア朝を捉える見方がある一方、本書の章立てでとりわけ心魅かれるのは、「死者 (The Dead)」と題した第14章だ。魂は永遠か、死者はよみがえるのか——それは、夫アルバートを亡くした後、黒衣しか身につけなかったヴィクトリア女王の嘆きを代弁するに留まらない。進化論によって人間の過去に対する認識が大きく変わり、聖書による説明がかつての有効性を失いつつある時代にあつて、ヴィクトリア朝の人びとは「死」に、いや正確には「死後」に強い関心を寄せた。そこにはさまざまな文化実践が認めることができる。テニスが大旅行をともした学友ハラム (Arthur Henry Hallam, 1811-1833) の急死に衝撃を受け、十数年をかけて書いた長編詩 (*In Memoriam*, 1850) しかり。ディケンズやコリンズ、ハーディ、ヘンリー・ジェイムズ、コナン・ドイルらが小説に登場させたゴーストスピリチュアリズムしかり。あるいは、19世紀後半に大流行した心霊主義、降霊術による死者との交信会。さらには、人類学や考古学の進展とも絡んでだろう、ヴィクトリア朝に迷い込んだ「遠い過去」を扱ったドイルやライダー・ハガートらの冒険・伝奇小説も高い人気を博した。『ピーターパン』のような子ども向けファンタジーにも、リチャード・ドイルやジョン・A・フィッツジェラルドらの妖精画にも、「人の命は永遠か」という問題がつきまとっていた。死は墓場で終わるわけではないのだ。

この章に刺激されて評者が想起したのは「テレパシー」という言葉だった。この言葉は、ケンブリッジ大学で古典学を教え、同大学トリニティ・カレッジに「心霊現象研究学会 (The Society for Psychical Research)」(1882) を立ち上げたフレデリック・W・H・マイヤーズ (1843~1901) の造語である。言葉や身ぶり手ぶりを使わなくても、すなわち肉体がなくても心を通じ合えるならば、同じく肉体のない死者の心 (= 靈魂) と対話・交流することも可能だろう——これこそ「ヴィクトリア朝的思考」ではないだろうか。「人間の心、靈魂は死後も存在するか」という問題は、きわめて「ヴィクトリア朝的」問題、それも文化の問題であった。それは、ヴィクトリア朝を「戦争とその記憶の時代」として読み解く第5章とも深い関連がある。

「戦争」というテーマは、これまで「文化の問題」としてとりあげられることはほとんどなかったように思われる。その点からもこの章は興味深いのだ

が、ふりかえってみれば、ヴィクトリア女王が即位した時代は、「ナポレオン戦争の記憶」がトラファルガー広場（1845年に空間として完成）やネルソン記念柱（1843年完成）といった「形」で姿を現す、計画と議論の真っ只中であつた。その後も、1852年のウェリントン将軍の死と国葬、その2年後のクリミア戦争参戦、さらには帝国拡大のための植民地戦争を加味すれば、ヴィクトリア朝の人びとはたえず戦争（とその記憶）とともにあつた。1860年～1901年の間に実際の戦闘がなかつたのは1869年、83年の2年だけだつたという（p. 89）。彼らの想像力を魅了したのは、平和ではなく戦争であつた。『タイムズ』のウィリアム・H・ラッセルがクリミア戦争に新聞記者として初めて従軍して以来、戦場から届く記事が人びとの想像力に強くアピールしたことも大きかつただろう。戦争におけるメディアの力と役割、そして戦争報道はどうあるべきかといった今日の問題は、実はヴィクトリア朝にはじまるのである。

紙面の関係上すべての章を紹介することはできないが、本書の大きな魅力は、冒頭の問題提起を受ける形で、ここに記してきたようなクロストークを可能としていることにある。と同時に、全体としてバランスよくテーマが配置されており、「文化」に強いこだわりを見せたヴィクトリア朝とは何だったかを考えさせる構成になっている。その意味でも、最終章に「ヴィクトリア朝人を記憶する」を配したことは説得的だろう。

ここでは、1901年の女王の死後、20世紀から21世紀初頭までの1世紀余りの間に、ヴィクトリア朝に対する見方やイメージがどのように変化したかが考察されている。ヴァージニア・ウルフやリットン・ストレイチーら、直後の世代が「ヴィクトリア朝的」なるものに強く反発したことはよく知られているが、それがどのようにして変化して、今のわれわれがこの時代に抱く関心へと至つたのか——それは、時間の経過やノスタルジーだけで説明のつくような単純な問題ではない。「ヴィクトリア朝」という時代とそこに生み出された文化に対するイメージの再構築には、20世紀の2つの世界大戦、並びに帝国解体やヨーロッパ再編、冷戦体制の崩壊といった国際情勢、とりわけそのなかで見失いつつある「イギリス人とは何か」を問う、現代イギリス社会のアイデンティティ論争が大きく関わっているのである。

20世紀末以降、21世紀に入った今はなお、ブッカー賞を受賞したA・S・

バイアットの *Possession: A Romance* (1990, 邦訳『抱擁』新潮社) に代表されるネオ・ヴィクトリア朝小説や、周縁的存在の視点から試みられる「正典」の書き直しなどを通じて、ヴィクトリア朝への関心は衰えをみせていない。それとともに、関心の内実や意味、方向性も少しずつ変わりつつあるようだ。それは、「ポストモダンのヴィクトリア朝事物は、ヴィクトリア朝人について以上に、われわれについて多くを語ってくれる」(p. 291) からかもしれない。

ヴィクトリア女王崩御から100年目の2001年、新聞・雑誌等で注目を集めたマシュー・スウィートの『ヴィクトリア朝人の創造』はこう言う。「ヴィクトリア朝人は、われわれの生活と感覚を、それとはわからない無数のやり方で形作った。彼らは今なおわれわれとともにある」¹ と。ならば、彼らの文化を考える「お伴 (companion)」である本書がとりあげた作品や事物のいくつかをまずは見てみる、触れてみる、読んでみる、耳をすましてみる。ヴィクトリア朝への新たな旅はそこからはじまるのだから――。

注

1. Matthew Sweet, *Inventing the Victorians*, London: Faber and Faber, p. xxiii.